



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3193号 2016.8.18 発行

### 【相模原事件】障害者襲った大量殺人 現代社会の写し鏡ではないと否定できるのか



BuzzFeed Japan 2016年8月16日

福島さんは小学生で全盲になり、高校生のときに聴覚も失った。東京大学先端科学技術研究センターで教授を務め、バリアフリーについて研究している。

相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件。「障害者は無価値」と存在を否定する容疑者の言動は社会に衝撃を与えた。なぜこんな考えが生まれるのか？社会はこれをどう克服したらいいのか？全盲と全ろうの重複障害がある東京大の福島智教授にメールでインタビューした。

【BuzzFeed Japan / 溝呂木佐季】

19人が犠牲になった知的障害者施設「津久井やまゆり園」=7月27日、相模原市

【質問】植松聖容疑者は園職員に「重度障害者は生きていても仕方がないので、安楽死させた方が良い」と話し、衆院議長宛ての手紙に「障害者は不幸を作ることしかできません」と書いたと報じられています。この考えの根本的な問題を教えてください。

問題点が三つあると思います。まず、この世界に「生きていてもしかたがない」ような人間は、誰一人いません。

次に「安楽死」という言葉を間違った意味で使っています。安楽死とは「助かる見込みのない病人を、本人の希望に従って、苦痛の少ない方法で人為的に死なせること」（広辞苑）という意味です。

しかし、重度障害者は「助かる見込みのない病人」ではありません。適切な手助けがあれば、元気に生き続けられる人たちです。したがって、容疑者が使っている「安楽死させる」という言葉は、実際は「殺す」という意味です。

最後に「不幸をつくる」という表現は、無意味で誤った表現です。なぜなら「幸福」や「不幸」は、机や椅子といった形のある物体のように「作る」ことや「壊す」ことはできないものだからです。

それらは一人ひとりの人間が心の中で感じ取るものです。同じ環境や出来事に対しても「不幸と感じる人」「幸福と感じる人」「幸不幸を感じない人」など様々でしょう。

そう考えれば「障害者は不幸を作ることしかできない」という断定的な表現は、そもそも文章として意味をなさないことがわかります。

現場近くで事件を報道するレポーター=7月26日、相模原市

【質問】福島さんは事件について、憎悪犯罪（ヘイト



クライム)と優生思想が絡み合っていると解説されています。どういう意味ですか。憎悪犯罪とは、民族や肌の色、信仰する宗教の違いなどによる差別を理由とする犯罪のことです。LGBT など比較的少数派のセクシュアリティ(性的指向性)を持つ人たちが対象にされることもあります。今回の事件は「障害」という属性(性質)を持った人たちが憎悪の対象になったと思います。

優生思想とは、人類の「悪質な遺伝」を淘汰し、「優良な遺伝」を保存することを目指す考え方で、人間の命に優劣をつける思想です。

ここでの「優劣」の基準ははっきり決まっているわけではありません。特定の民族が「劣っている」とされたり、ある種の病気や障害のある人が「劣っている」とされたりします。優生思想の恐ろしいところは、それが現実の政治や政策に影響を与える危険性のある思想だという点です。

ナチス・ドイツは第二次世界大戦中、優生思想に基づき、ユダヤ人をおよそ 600 万人虐殺しました。そして「生きるに値しない生命」として、知的障害者や精神障害者などをおよそ 20 万人抹殺しました。

しかし、これはナチスだけの問題ではありません。優生思想は第二次大戦後も世界各国で生き延びてきました。例えば、日本では 1948 年制定の「優生保護法」が代表的です。一部の障害者やハンセン病患者などが子供を作れないように、強制的に手術をされました。1996 年に「母体保護法」に改正されましたが、優生思想的側面が完全になくなったとは言えません。

また現在も「出生前診断」で胎児に障害があると判明した場合、堕胎手術を受ける例は少なくないと言われます。つまり、優生思想は今の社会にも根深く存在しています。

**【質問】** 19 人が殺害された事件。これは二重の殺人だとも説明されています。肉体を殺す「生物的殺人」と、人間の尊厳を否定する「実存的殺人」だと。どういう意味ですか？

「生物学的殺人」と呼んだのは、一般的な意味での殺人のことです。つまり、人の肉体的な命を奪う行為ということです。

「実存的殺人」と呼んだのは、重度の障害を持つ人の、人間としての尊厳や生きている意味そのものが否定されたということです。

容疑者は障害の重い人たちを優先的に襲ったとみられています。つまり、容疑者にとって殺害の対象は「重度障害者」という「属性」を持った人間なら、誰でもよかったのです。つまり、彼にとって「重度の障害者」は生きる価値がないという意味で、「誰でも同じ」だったわけです。

しかし、障害があってもなくても、「同じ」人間などいるはずがありません。19 人の重度障害者の人たちには、19 通りの人生があり、家族があり、それぞれ好き嫌いがあり、異なる具体的な体験があるはずです。



それらがすべて無視され、重度障害者なのだからそもそも生きる意味がない、生きる資格がない、と決めつけられたことを「実存的殺人」という言葉で表現しました。

**犠牲者に花を捧げる親子=7月28日、相模原市**

**【質問】** なぜ、こういう考えを持つ人間が生まれるのでしょうか？

容疑者は衆議院議長にあてた手紙で、重度障害者を抹殺する理由の一つとして「世界経済の活性化」という言葉

を使っています。つまり、重度障害者の存在は、経済活動の活発化や経済成長にとってマイナスになる、だから抹殺するのだ、というのが犯行の動機と思えます。

これは何にもまして--ときには人間の命よりも--経済的な価値を優先させる、という考え方です。こうした考え方が育った背景には、今の日本社会の中に、経済活動を何よりも優先させるという風潮があることが関係しているのではないかと思います。

つまり、品物やサービスを生産する労働力や生産効率で、人間の価値の「優劣」を決めて

しまうという風潮です。

こうした風潮は、学校教育にも「逆流」するでしょう。学校では、直接的に労働力や生産能力が問題になる代わりに、成績や偏差値の高低が生徒や学生の優劣を決めてしまいます。成績や偏差値が非常に低い子供たちは、まるで存在価値がないかのように扱われたり、自分でもそう思ったりしてしまう。そうした傾向はないでしょうか。

こうした社会や学校での風潮や傾向が容疑者の考え方に何らかの影響を与えたのではないかと思います。

【質問】私たちはどうしたらいいのでしょうか。学校や社会で、どんな議論を進めるべきでしょうか？

人が人に抱く「差別意識」とは何かについて、「障害」を念頭において真剣に議論することが大切だと思います。

そもそも、障害者に対する差別の問題は、他の差別問題とは異なる面があると思います。例えば、人種の違いによって生じる差別意識は、肌の色や骨格や容貌の違いなどによって引き起こされる、なんら本質的な根拠のない「上辺にとらわれた」差別です。

女性差別も、一定の肉体的な条件の違いはあるものの、現代社会で最も重視される能力である知的能力においては、男女間に何の差もないため、やはり本質的な根拠はありません。したがって、これらの差別は、少なくとも理論的には、いずれ克服可能な差別だと思われるます。

一方、重度の障害者への差別とは、現代社会に要求される生産能力（知的能力）の低さに対する差別です。

現代社会で要求される生産能力は、記憶力・情報処理力・コミュニケーション力などに代表される、知的諸能力に基礎を置いています。

こう考えると、私たちの中に、重度の障害者への差別は「差別ではない。当然の区別だ」と考える意識が生まれるのではないのでしょうか。

しかし、大切なのはここからです。こうした障害者の「(知的)能力の低さ」をどう扱うかは、障害のない人間同士での能力の差をどう考えるかということと、根っこはつながっています。

ここで容疑者の犯行について再度考えてみましょう。確かに容疑者の考えは極端であり、その犯行は残酷で恐るべきものです。しかし、私たちと容疑者がまったく無関係だとは言いきれないと、私たち自身が、心のどこかで気づいてしまっている面があるのではないのでしょうか。

容疑者は、重度障害者の存在は経済の活性化を妨害すると主張していました。こうした考えは、私たちの社会にもあるでしょう。労働力の担い手としての経済的価値で、人間の優劣が決められてしまう。そんな社会にあっては、重度障害者の存在は大切にされず、軽く見られがちです。

でも、本当は、障害のない人たちも、こうした社会を生きづらく、不安に感じているのではないのでしょうか。

なぜなら、障害の有無にかかわらず、労働能力が低いと評価された瞬間、仕事を失うなどの形で、私たちは社会から切り捨てられてしまうからです。

では、私たちは何を大切にすればいいのでしょうか。人間の能力の差をどう考えれば良いのでしょうか。そもそも人間が生きる意味というのはなんなのでしょうか。

こうした論点を真剣に議論する。生活の豊かさとは何かを共に考えていくべきだと思います。

【質問】事件を受けて、若者にどんなことを考えてほしいか。最後にメッセージをお願いします。

学校での勉強を含め、一般に知識を得ることは意味があります。本を読んだり、映画を見たり、ネットで情報を得たり。それぞれ大切な知的活動です。

でも、これらの多くは、「だれか」、つまりあなた以外の人が考えた結果や感じたこと、生

み出した知識をあなたが眺めたり、吸収したりしているだけです。しかし、現実の社会で起きていることは極めて複雑で、それを理解するために、方程式のように決まった方法で正解を求めるといふふうにはいきません。さらに、あなたの人生には、料理のレシピのような決まった材料も手順も示されていません。では、どうすれば良いのでしょうか。道は一つだと思います。それは、あなた自身が自分の力で考え、感じて、さまざまに思いめぐらし、探し続けること。それしかありません。

#### 「自分は救世主」「日本のため」容疑者供述 相模原殺傷 朝日新聞 2016年8月17日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が死亡した事件で、うち9人の殺人容疑で再逮捕された元職員の植松聖（さとし）容疑者（26）が「殺害した自分は救世主だ」と供述していることが捜査関係者への取材でわかった。「(犯行は)日本のため」などとも説明しており、神奈川県警は植松容疑者が身勝手な考えを膨らませて事件を起こしたとみている。

捜査関係者によると、植松容疑者は「障害者の安楽死を国が認めてくれないので、自分がやるしかないと思った」と供述。こうした考えに至った背景について、中学時代の同級生や園で働いた経験などを挙げ、「障害があつて家族や周囲も不幸だと思った。事件を起こしたのは不幸を減らすため。同じように考える人もいるはずだが、自分のように実行できない」と話しているという。

県警は17日午前、植松容疑者を横浜地検に送検した。植松容疑者は津久井署を出る際、青いシートのようなもので顔を隠し、身をかがめて車に乗り込んだ。(天野彩、照屋健)

#### 障害者殺傷 社会が賛同するはずだったとの趣旨供述 NHKニュース 2016年8月17日



先月26日、相模原市の知的障害者施設で入所者が刃物で刺され19人が死亡、27人が重軽傷を負った事件で、入所者9人に対する殺人の疑いで再逮捕された施設の元職員の男が調べに対し、事件を起こした自分に社会が賛同するはずだったという趣旨の供述をしていることが捜査関係者への取材でわかりました。

この事件で警察は、相模原市緑区の知的障害者の入所施設「津久井やまゆり園」の元職員、植松聖容疑者（26）を15日、入所者9人を殺害した疑いで再逮捕し、17日、身柄を横浜地方検察庁に送りました。

これまでの調べで植松容疑者は、事件の動機として障害者を冒とくするような供述をしているということですが、その後の調べに対し、事件を起こした自分に社会が賛同するはずだったという趣旨の供述をしていることが、捜査関係者への取材で新たにわかりました。

植松容疑者は事件前のことし2月、施設の担当者から障害者への差別的な発言を撤回するよう注意された際にも「ことし1月から2月ごろにこの考えに気付いた。自分は間違っていない」などと反論していたということです。

捜査当局は、植松容疑者がこうした主張を持つようになった詳しいいきさつを調べています。

#### 放置車活用、自転車快走 障害者が再生 札幌のNPO事業





北海道新聞 2016年8月17日  
修理作業を丁寧に進めるホープ再生自転車販売の作業員たち

社会的弱者を支援するNPO法人生活相談サポートセンター（札幌市西区山の手4の1）の中古自転車の再生事業が好評だ。知的障害者らに社会とのつながりを持ってもらう第一歩として、昨年からはじめた試みで、本年度の販売台数は既に年間目標の500台を超えた。働く人たちは「お客さんに喜んでもらえることが何よりうれしい」と目を輝かせながら、修理や整備に

汗を流している。

「もう少し、さびが落ちるんじゃないか」。中古自転車のリサイクル店「ホープ再生自転車販売」の作業所では、10人を超す作業員が連日、やすりを使ってフレームやタイヤのスポークのさびを落としたり、ドライバーで鍵を付けたりしている。慣れない作業員が先輩に分らないことを尋ねる光景もみられ、現場の雰囲気は和やかだ。

2009年に発足したサポートセンターは11年、知的障害や精神障害を持つ人らのために、工芸品や楽器の製作などを行う「ホープ」を設立。昨年3月に自転車事業を新たに立ち上げた。きっかけは、ホープ前に放置された自転車を警察に届けたことだった。深刻化する放置自転車問題を知ったサポートセンターの斎藤博之理事長（64）は「黙っていればスクラップにされる自転車を再利用できる。障害者のやりがいにもつながる」と事業化の理由を語る。

放置自転車は市の競売などで調達。当初、作業員は3人で、初年度は約160台を再生して販売した。丁寧な仕事ぶりが口コミで評判を呼び、本年度は8月15日時点で770台を売った。

このため、現在は作業員を14人に増やして対応している。摂食障害を患い、2カ月前から働き始めた織笠里菜さん（30）は「お客さんが、自分が修理した自転車を購入して乗ってくれたのを見て、うれしくなった。自転車修理の腕前をもっと上げたい」と意気込む。

中古自転車の価格帯は5千円から2万円と、いずれも新品の半額ほど。作業は週6日間、午前10時から午後6時までだが、作業員のコンディションに合わせて「週3日、午前中だけ」など多様な働き方を受け入れている。斎藤理事長は「働くことに自信を付け、一般就労できるようになれば」と期待している。

アートだけじゃない！犬島に注目 樹木に名札、土産にクッキー

山陽新聞 2016年8月17日



「犬島再発見の会」が島内の樹木に取り付けたネームプレート

在本商店が販売する「いぬじまのんびりくッキー」

瀬戸内国際芸術祭やアートプロジェクトで注目を集める岡山市の犬島（東区犬島）の住民が、来島者向けに、

樹木に名称などを明記したネームプレートを取り付けたほか、土産用のクッキーを商品化した。



ネームプレートは縦15・7センチ、横20・8センチで、プラスチック製の板を木枠にはめた。樹木の和名を大書し、属する科や花が咲く時季も紹介。外国人観光客も多いことからラテン語を基本とした学名も表記した。

設置したのは市民グループ「犬島再発見の会」。来島者から木の種類をよく尋ねられるのに対応した。倉敷市立自然史博物館（同市中央）の狩山俊悟学芸員に協力を依頼し、人通りが多い道沿いにあるといった基準でトベラやオオシマザクラなど34種類50本を選定。今年3月、各樹木に1枚ずつ手作りのプレートを取り付けた。

同会の在木桂子代表（72）は「自然に親しんでもらい、より楽しい滞在にしてほしい」と話している。

クッキーは、犬島港近くにある在木商店が商品化し、「いぬじまのんびりくっきー」と名付けた。犬や犬小屋などをかたどっており、プレーン、抹茶、ココア、紅茶の4種類をランダムに袋詰めした。1袋65グラム程度。200円。

9月4日まで夏会期を開催している今年の瀬戸内国際芸術祭のテーマに「食」があることから企画。障害者就労支援施設「すだちの家」（東区正儀）に製作を委託した。

同商店は「日持ちがするクッキーはお土産にぴったり。もっと多くの人に犬島を知ってもらうきっかけにしたい」としている。問い合わせは同商店（086—947—0279）。

## 災害弱者の把握難しく 地方議員、避難者カード整備求める

日本経済新聞 2016年8月17日

災害時の避難所で自治体がつくる「避難者名簿」（避難者カード）について、地方議員グループが8都道県の計266自治体の状況を調査したところ、支援が必要な災害弱者を把握するための項目がない自治体が多く、災害時に有効な対応が困難となる恐れがあることが分かった。グループが17日、発表した。

内閣府は東日本大震災の教訓を踏まえ、災害時には妊産婦や障害者など「特別な配慮を必要とする避難者の速やかな状況把握」が必要としている。避難者支援のため、内閣府にカードの様式の整備を求める活動をしている地方議員21人が地元を中心に調査した。

対象の8都道県は北海道、埼玉、千葉、東京、福井、三重、兵庫、愛媛。

発表によると、災害弱者を巡り、カードに病気やけがに関する項目を設けていた自治体は27%、介護を必要とする人に関する項目は24%、障害は18%、妊産婦は11%、アレルギー、医療機器利用はそれぞれ8%と低調だった。外国語表記があったのは3%だけだった。

内閣府は2013年8月、災害時の避難所の生活環境改善に向けたガイドラインをつくり、その中で避難者一人一人の支援の必要性を把握することが望ましいとしていた。グループは来月、各自治体のカードの詳細な項目を公表する予定。

## 虐待対応 役割明確化へ

読売新聞 2016年08月17日

### ◆児相と市町村、道が見直し

道は16日、児童虐待への対策を強化するため、児童相談所と市町村との役割を見直すことを決めた。有識者による専門部会を設置して市町村の役割や道の支援策を整理、今年度内に方向性をまとめる。

見直しは、児相と市町村の役割の明確化などを盛り込み、今年5月に成立した改正児童福祉法を受けて実施する。道内では、相談対応件数が増加する一方、相談の一次的な窓口となる市町村と児相の役割分担があいまいで、児相の職員が専門性を十分に発揮できない場面もある。このため、同法施行に伴い拡充する児童虐待対策を適切に行えるよう、役割分担を新たに示すことにした。

この日は専門部会の初会合が開かれ、「市町村の負担能力を把握しなければ、効果的な役

割分担はできない」などの意見が出た。道は専門部会の方向性を基に役割分担を示す指針の作成や人材育成で市町村を支援する考えだ。

道内には道立8か所と札幌市立1か所の計9か所の児童相談所があり、昨年度の相談対応件数は前年度比886件増の3900件（速報値）と過去最多を記録している。

## 京大、新生児臍帯血でiPS作製 備蓄用、成人より高品質

共同通信 2016年8月17日

再生医療に利用する備蓄用の人工多能性幹細胞（iPS細胞）を、京都大iPS細胞研究所（山中伸弥所長）が、新生児の臍帯血を使用して作ったことが17日、分かった。同研究所は、成人の血液から作った場合より遺伝子変異が少なく、品質が良いとしている。研究機関などへの提供態勢が近く整う見込みで、iPS細胞をさまざまな細胞や組織に変化させて移植する再生医療の実用化を促進させそうだ。

同研究所によると、今回使ったのは東海大病院（神奈川県）で保管されていた臍帯血。提供者とその家族から同意を得た上で作製し、品質などをチェックして7月に完成した。



### 余貴美子「笑わない努力をするのは難しかったです」

ザ テレビジョン 2016年8月17日

「はじめまして、愛しています。」で堂本真知を演じる余貴美子

毎週木曜夜9時より放送中の尾野真千子主演ドラマ「はじめまして、愛しています。」（テレビ朝日系）で、児童相談所のベテラン職員・堂本真知を演じる余貴美子にインタビューを敢行。

本作へ出演した感想や運命の出会いなどについて話を聞いた。——あらためて今回のオファーを受けて、感想を教えてください。

私、脚本の遊川和彦さんのファンなんです。とげがあって、どこかスリルのある会話劇が好きで、またご一緒できて本当に良かったと思いました。以前、連続テレビ小説「純と愛」（'12～'13年、NHK 総合ほか）で一緒させていただいて、もう一度お会いしたいなと思っていたので純粋にうれしかったです。

——特別養子縁組制度についてはご存じでしたか？

私、実はこの作品のお話を頂く前に「マザーズ 産みの親は誰ですか。」（日本テレビ系）という、養子の子が自分はどこからきたのか、ルーツ探しの苦悩と戸惑いに迫る番組でナレーションをやっていたんです。

その後に偶然このドラマのお話がありましたので、遊川さんもそれをご覧になって「何か縁があるな」と言ってくださっていて。どういうことなのかというのちょっと知識がありました。でも、実際にドラマに入ってみると、知らないことの方が断然多かったです。

——今回の役への取り組みで意識されていることはありますか？

ドラマでは、実際には違うんだけどいろいろと制約があって本当のことができないということもあるので、その辺は葛藤しながらも前向きに演じています。

真知は温かい目で子供と向き合うことや、自分のことよりも人の幸せを考えられる人ということで、自分とは真逆な人なので（笑）、そういうところをどうしたらいいか必死に考えながら演じております。

——パッと見、厳しい中にも優しさがあるという役柄ですよ。

そうですね。そのあたりは台本を読んでいて思ったので、まずは全然笑わない雰囲気を意識しました。私、普段はいつもヘラヘラしちゃうので、笑わない努力をするのは難しかったですね。

やっぱり誰に対してもムスツとしているより、感じよくしていきたいじゃないですか(笑)。でも、あまり表情の変化を出さないように監督とも相談して心掛けています。

——シビアな作品ですが、現場の雰囲気はどんな感じでしょうか？

子供たちともみんな仲良くしていますよ。彼らはまだ子供なんですけど、やっぱり男の子ですね。

男優同士で敵対心を持っていて、「誰が一番格好いいと思いますか？」って尾野真千子さんに聞いているのが面白かったです(笑)。あ、小さくてもやっぱり男の子なんだなあと。

——個人的には真知の大人たちへの態度と子供たちとの態度にすごくギャップがあって、驚きました。

そうですか？ やっぱりそういうものなのかなって思って、自然とそう接しているんですよ(笑)。あそこにいる子供たちは、何らかの理由で親元を離れた子。

そういう子と接しているから、自然と柔らかく接することになるのかなと思っています。もちろん何が正解なのかは分かりませんが。

——ビジュアルに関してはどうですか？

あの眼鏡は私の自前の物なんです。自分でしていた眼鏡を現場に持ってきて、衣装合わせをしたところこれがいいなと。格好いいなと思ってかけていたんですけど、それがまんまと使われました(笑)。

——このドラマは、常に毎回続きが気になる終わり方をされますよね。

毎回一旦は完結と言いますか、ホッとする展開になるのに、また何か起こりそうな展開が最後に待っていますよね。

絶対にずっと幸せではいられないというか、何かしら不幸が待っているというか。スリル満点な展開の仕方だと思います。あと、美奈(尾野)の心の声がちゃんと聞けるというのもリアルですし、視聴者の方が共感できる部分もたくさんありますよね。

——養子縁組と縁がない人でも何か感じることもありそうですね。余さんはどう感じましたか？

血のつながりがなくても子供を大事にする人がいれば、本当に血がつながっていても虐待してしまうひどい親もいるわけで。そういう血のつながりがなくても描ける愛というものもあるんだなと考えさせられました。

同様に血がつながっていても愛を表現できない人もいるので、その辺のことも深く考えさせられる作品だなと思っています。

——ドラマにちなんで、運命の出会いや運命を感じるエピソードはありましたか？

運命ですか…。私、今の主人と一緒にになるとき、お互いの実家の電話番号、下4ケタが全く一緒だったんですよ！

つまらないことですが、確か「0595」でした(笑)。確率的になかなかないですよ。番号が全く同じなんて。それはいま思えば運命だったなと感じています。

——信次(江口洋介)だったらその4ケタで語呂合わせするんでしょうね(笑)。

確かにそうでしょうね！(笑) すいません、なかなか気が利いたことは思い付かず…。

——最後に、視聴者の皆さんにメッセージをお願いします。

現実問題として、親元を離れることになってしまった子供たちがたくさんいます。そういった現状や、特別養子縁組に関するいろんなことを知ることができるドラマになっていますし、それでいてちょっと日常の面白いやりとりも入っている。

遊川さん節のちょっと笑えるドラマになっていて、知りたい気持ちや感動したい気持ちもいっぺんに味わえる作品だと思いますので、最後までご覧ください。

「はじめまして、愛しています。」

毎週木曜夜 9:00-9:54 テレビ朝日系で放送

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

